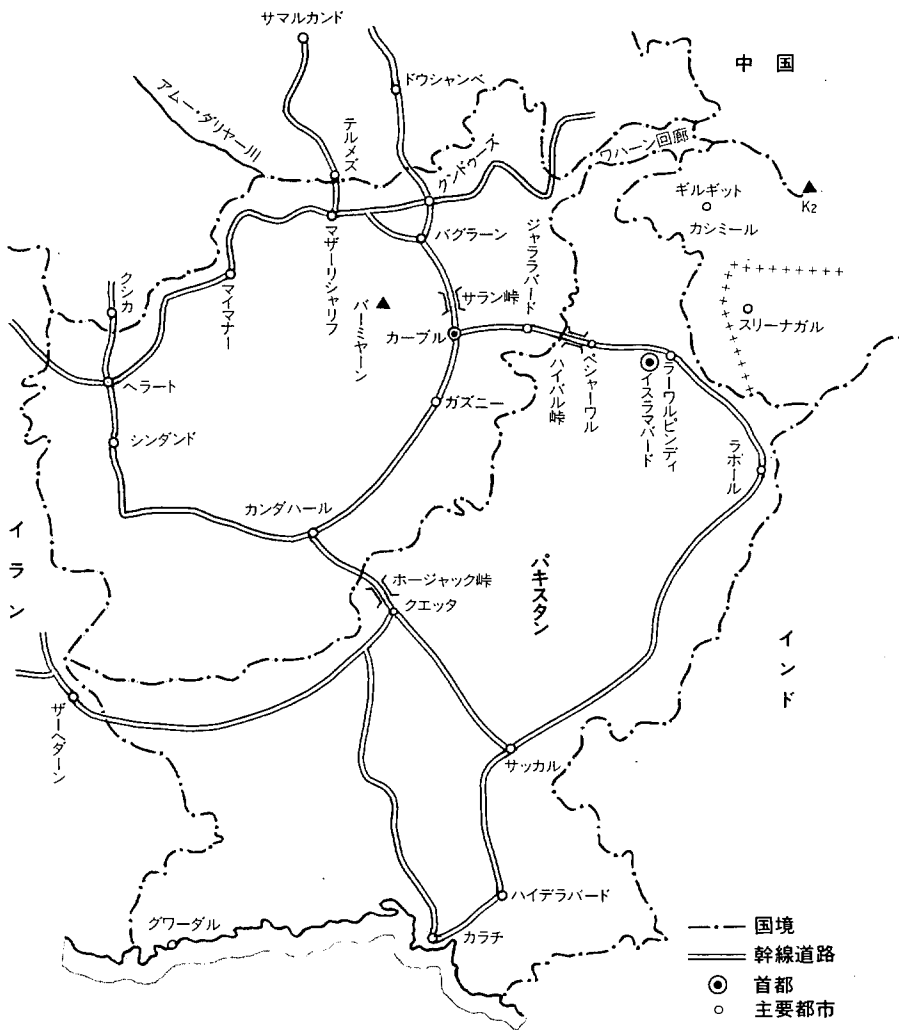


アフガニスタン

アフガニスタン・イスラーム国	宗教	イスラーム教
面積 64万7497km ²	政体	共和制
人口 1888万人 (1994年央推計)	元首	ムラー・ムハンマド・ラバニー議長
首都 カブール	通貨	アフガニー(市場レート:1米ドル=30,000アフガニー, 1997年12月現在)
言語 ダリー語, バシュトゥー語, その他	会計年度	3月21日～3月20日 (アフガン暦)



タリバーンによる全国制覇の失敗

マザリシャリフ攻防戦

たか はし ひろ し
高 橋 博 史

概 況

全国制覇を目指すタリバーンは、積極的な軍事活動を遂行し反タリバーン勢力の支配地であるアフガン北部に対する攻撃を行った。タリバーンは、ドストム将軍が率いるイスラーム国民運動の根拠地であるアフガン北部のマザリシャリフに5月と9月の二度にわたって攻撃を行った。マザリシャリフ市の陥落の可能性が大きくなったこともあり、一時は、タリバーンが全国制覇を果たすと予想されたが、反タリバーン勢力の頑強な抵抗に遭い、失敗に終わった。

タリバーンは、国連が主催したアフガン各派実務者の会合終了直後、カーブル北方において反タリバーン勢力に対する戦闘を再開した。しかし、反タリバーン勢力の頑強な抵抗に遭いアフガン北部への侵攻を果たすことはできなかった。

その後、5月にドストム将軍の参謀であったマレック将軍がタリバーンに寝返るという叛乱事件が発生した。しかし事件は、ドストム将軍が追放されマレック将軍がイスラーム国民運動の代表に納まり、反タリバーン勢力に留まるという結末になったが、一時はタリバーンの全国制覇は時間の問題とまで予想された。

9月に至りタリバーンは、再びマザリシャリフに対して激しい攻勢をかけ、マレック将軍は逃亡し、同市は陥落寸前の危機に曝された。しかし、ドストム将軍が亡命先のトルコから帰還し、シーア派イスラーム統一党がタリバーンの攻勢に激しく抵抗したことから、タリバーンによるマザリシャリフ攻略は再び失敗に終わった。

ドストム将軍の帰還は、イスラーム国民運動内におけるマレック将軍との権力闘争を再発させ、マレック将軍はイランに亡命したが、タリバーンと反タリバーン勢力の軍事バランスには大きな変化がなく終わった。

国内政治

タリバーンによる中央山岳地帯への進攻

1997年1月中旬、国連主催によるアフガン各派実務者会合がパキスタンのイスラマバードにて開催された。同会議終了直後からタリバーンはカーブル北方における軍事活動を活発化し、16日、バグラム空軍基地およびチャリカル市を奪取した。23日にはアフガン北部に通じるサーラング峠の麓にある軍事的要衝ジャバルサラージ、グルバハールを陥落させた。しかし、サーラング峠の入口がマースド司令官部隊によって爆破、封鎖されたため突破は困難となった。

サーラング峠、パンジシール渓谷を經由する北部へのルートを遮断されたタリバーンは、新たな北部への通路を求めて中央山岳地帯であるハザーラジャード地方への侵入を開始した。

ハザーラジャード地方は、アフガニスタンの少数民族ハザーラ族の居住地域であり、シーア派イスラーム統一党の支配下にある。そのためシーア派イスラーム統一党との直接的軍事対決となった。タリバーンの現地指揮官は、バーミヤン攻略の際に世界的に著名なバーミヤンの大仏遺跡を破壊すると発言し、世界中の耳目を集めた。

当初、タリバーンは戦いを有利に進め、2月25日、バーミヤン攻略の最大の難所であるシバル峠の麓シェイフアリーを攻略するのに成功した。しかし、シーア派イスラーム統一党は激しい反撃を開始し、タリバーンは大きな打撃を受けて敗退した。

マレック将軍の叛乱とタリバーンのアフガン北部への侵攻

その後、軍事情勢の大きな変化はなく、膠着状態が続いた。5月15日、イスラーム国民運動のハカニー指揮官殺害事件が発生し、同派におけるドストム将軍とマレック将軍との派閥抗争が一挙に表面化した。19日、マレック将軍は、ドストム将軍がイスラーム国民運動の代表を辞任しない限りタリバーンを支持すると表明して、アフガン北部および西部におけるイスラーム国民運動支配地域において叛乱を起こした。24日、マザリシャリフがマレック将軍の部隊に制圧され、ドストム将軍はマザリシャリフを脱出し、ウズベキスタンを經由してトルコに亡命した。

同日、タリバーンはラザック・ヘラート知事をアフガン北部司令官に任命し、



マザリシャリフに進入したタリバーン兵士(WWP)

マレック將軍を外務次官に任命したと発表した。25日、ムラー・ガウス外相代行を団長とするタリバーンの最高幹部で構成された代表団はマザリシャリフに入城した。同時に、マレック將軍が自派の部隊に対し、タリバーンに対する戦闘行為の停止を命じた。タリバーンは、アフガン北西部における最前線から続々とマザリシャリフに進入した。タリバーンの根拠地カンダハールあるいはカーブルからもタリバーンの兵士がマザリシャリフに空輸され、アフガン北部に増派された。

タリバーンによるアフガン北部の制圧が確実であると判断したパキスタンは、タリバーンを政府承認すると発表した。パキスタンに続きサウジアラビア、アラブ首長国連邦もタリバーンの政府承認に踏み切った。

マレック將軍の反乱事件は、反タリバーン勢力内に大きな動揺を引き起こした。反タリバーン勢力支配地域における各地の指揮官たちは、情勢の変化を見極め、機敏に対応するため反タリバーンの旗を降ろして中立を表明した。カーブル北方のサーラング峠においても、同時を守備するマスード司令官指揮下のサーランギー指揮官がタリバーン支持を表明して、タリバーンの部隊のサーラング峠通過を許可した。しかし、こうして反タリバーン勢力が浮き足立ち、タリバーンの部

隊が空路および陸路を通じて続々とアフガン北部へ進入しているさなか、27日、マザリシャリフ市内において、タリバーンとシーア派イスラーム統一党による軍事衝突事件が発生した。

タリバーンは、マレック将軍に武装解除は実施しないと約束していたにもかかわらず、市内のハザーラ族居住地区において、シーア派住民の武装解除を実施しようとしたため、シーア派イスラーム統一党の部隊と武力衝突した。シーア派イスラーム統一党はマレック将軍に対し、武装解除は受け入れることができないとした。タリバーン側はあくまで武装解除を主張し、マザリシャリフ市内において本格的な戦闘が開始された。

28日、マレック将軍は、タリバーン側が合意を踏みにじったとして突如、タリバーンの部隊に対し攻撃を加えた。マレック将軍はタリバーンの指揮下にあると信じていたタリバーンは、ほぼ無防備の状態にあり、一部には武器を持たない兵士もいた。戦闘はタリバーン側に多くの死傷者と捕虜を出し、タリバーンはマザリシャリフから撤退した。ガウス外相代行を団長とするタリバーン代表団およびタリバーンの最高幹部等も多くが捕虜となり一部は戦死、行方不明となった。マレック将軍、ハリリ・シーア派イスラーム統一党党首およびラバニー派のマスード司令官は、直ちにイスラーム国民連合救国戦線を結成し、タリバーンに対し統一戦線を組んだことを発表した。

アフガン西部の最前線においても、それまでタリバーンの部隊の通過を容認していたマレック将軍指揮下の部隊が、突如タリバーンの部隊に襲いかかった。タリバーンの部隊は、退路を断たれ数千人が捕虜となった。サーラング峠においても、サーランギー指揮官がマスード司令官への忠誠を表明して峠を封鎖した。同峠を通過し、マザリシャリフを目指して進軍を続けていたタリバーンの部隊もまた退却路を断たれ、プルホムリにおいて2000人が包囲された。こうしたタリバーン側の混乱に乗じて、30日、ラバニー派のマスード司令官は、パンジシール溪谷から出撃しカーブル北方の要衝の地ジャバルサラージを奪還し、31日にはチャリカール市に迫って激しい攻防戦を展開した。

6月11日、反タリバーン勢力は、アフガン北部の要衝プリホムリに立てこもったタリバーンの部隊を攻撃して同市を攻略した。タリバーンは北方のバグラーンに敗走し、5月のアフガン北部への侵攻で占領した地区の全てを失うに至った。

北のバグラーンに潰走した約1000人に及ぶタリバーンの部隊は、バグラーンを支配するパシュトゥーン人でヘクマティヤール派のバグラニー指揮官に救援を求め

た。死に体と考えられていたタリバーンの部隊は、バグラニー指揮官の支援を受け、バグラニーの北部に位置するクンドゥーズを急襲し、17日、同市を攻略した。

マレック将軍の叛乱によって引き起こされたタリバーンと反タリバーン勢力によるマザリシャリフ攻防戦は、タリバーンが辛うじてクンドゥーズを陥落させることに成功しただけで、タリバーンの最高幹部を含む数千人のタリバーン兵士が反タリバーン勢力の捕虜となって終了した。

その後、クンドゥーズを占拠したタリバーンは、空輸によって部隊の増強をはかるが、マスード司令官は、カーブル北方に対する軍事活動を活発化してタリバーンへの軍事的圧力を強めた。19日、カーブル北方のチャリカール市を攻略、20日にはバグラム空軍基地を奪取した。さらに26日、マスード司令官率いる反タリバーン勢力の部隊は、カーブルへの爆撃およびロケット攻撃を行い、首都の北方20^キまで迫った。

しかし、反タリバーン勢力内の各派の派閥闘争は、軍事作戦の不協和に見られるごとく、マレック将軍がイスラーム国民運動の代表に就任しても大きな変化はなかった。こうした不統一の状況を打破し、派閥抗争を終焉して、タリバーンに対して一丸となって対決するため、反タリバーン勢力は、ラバニー大統領を首班とする連合政権の内閣改造を実施した。8月13日、反タリバーン勢力は、ラバニー大統領が留任、ガフォールザイ外相が首相に就任、マスード司令官が国防相、マレック将軍が外相に就任したと発表した。しかし、ガフォールザイ首相等の反タリバーン勢力の幹部は、バーミヤン訪問の途次、墜落事故を起こして死亡した。

タリバーンのマザリシャリフへの再攻勢とドストム将軍の帰還

9月8日、タリバーンは、再びイスラーム国民運動内における派閥闘争に乗じて、マザリシャリフの南方に位置するタシクルガン市を攻略することに成功した。

マレック将軍はサマンガン県下の不穏な動きに指揮下の将軍をマザリシャリフ東方約50^キにあるタシクルガン市に派遣し、地元のパーチャ指揮官の武装解除を命じた。しかし、逆に同指揮官はタリバーンへの支持を表明してタシクルガン市を制圧した。タリバーンに支援された地元を中心とする指揮官の部隊はマザリシャリフに向けて進撃し、一時、マザリシャリフ郊外にある空港を制圧した。急激な軍事情勢の変化に、マレック将軍およびラバニー大統領は即座に西にあるシベルガンに脱出した。9日、シーア派イスラーム統一党およびイスラーム国民運動は大量の部隊を動員して、夕刻には空港の奪取に成功した。他方、マスード司令官

は、タルカンからクンドゥーズ奪取のため出撃し、タルカンとクンドゥーズの中間地点にあるハナバードの攻略に成功した。

9月10日、タリバーンは、マザリシャリフへの空爆を含む激しい軍事攻勢を実施し、特に空港争奪をめぐる激しい戦闘が行われた。しかし、マレック将軍が率いるイスラーム国民運動は、同将軍が脱出したこともあり、完全に四分五裂となって、指揮統一が不可能な状態に陥った。そのため、同市は混乱状況になり部隊の指揮を離脱した一般兵士および一般市民も含んだ人々による国連事務所およびNGO事務所に対する略奪が行われた。

タリバーンの激しい攻勢に対し、マザリシャリフ市内においては、5月のマザリシャリフ事件と同様にハズラ族によって構成されるシーア派イスラーム統一党の部隊が必死の攻防戦を展開した。しかし、タリバーンの激しい軍事的攻勢により、それまで反タリバーン勢力に組していた指揮官たちは、タリバーン優勢と見て、次々とタリバーンに寝返り、反タリバーン勢力は大きな混乱に陥った。

12日、ドストム将軍は亡命先のトルコを出国し、タシケントを経由してマザリシャリフに到着した。伝えられるところでは、ウズベキスタンから数十台の戦車等の軍事的支援を受けて入国した。しかし、マザリシャリフ市内は混乱状態にあり、組織的な軍事作戦を遂行することが不可能な状態にあった。ドストム将軍はマレック将軍がマザリシャリフを去った以上、イスラーム国民運動の将兵たちは同将軍の帰還を歓迎し、一挙にタリバーンを同市から放逐することができると考えた。しかし、同市は予想以上の混乱状態にありドストム将軍自身、数日後にはマザリシャリフを脱出せざるを得なくなった。シーア派イスラーム統一党の本拠地バーミヤンにハリリ党首を訪問したドストム将軍は、同党首から軍事支援を取りつけ再びマザリシャリフの戦線に戻った。その間にもタリバーンによる攻撃は止まず、17日、ウズベキスタンとアフガニスタンを繋ぐ国境の町ハイラトンがタリバーンによって陥落した。しかし、ドストム将軍はシーア派イスラーム統一党の部隊の支援を受け、10月3日、必死の戦闘の結果、マザリシャリフを防衛することに成功した。さらに7日、ドストム将軍とシーア派イスラーム統一党の部隊はハイラトンを奪取し、13日にはタシクルガンも陥落させ、タリバーンをクンドゥーズに退却させることに成功してタリバーンによる二度目のマザリシャリフ攻撃を失敗に終わらせた。

マレック将軍は一時、イランに逃亡したが、戦況が改善されたことから再びアフガニスタンに帰還した。マスード司令官およびハリリ・シーア派イスラーム統

一党党首は、両將軍の和解に努力したが調停は失敗し、11月3日、武力衝突に発展した。17日、ドストム將軍は、マレック將軍によって殺害された大量のタリバーン兵捕虜の遺体が発見されたと発表した。これによってドストム將軍は、マレック將軍の再度のタリバーンへの寝返りと、孤立化を図った。両派の武力衝突はアフガン西部を中心に続き、23日、ドストム將軍派がマレック將軍派の根拠地マイマナを制圧し、マレック將軍がトルクメニスタンに逃亡して両派の権力闘争が終焉した。

ドストム將軍は、イスラーム国民運動の内部固めの必要性から、国連に対しタリバーンと捕虜交換を行う用意があるむね通報し、国連に協力を要請した。11月26日、捕虜交換の交渉はある程度成立したが、タリバーンは突然ドストム將軍派の交渉代表を逮捕し、ドストム將軍側に捕らえられているタリバーン捕虜全員の釈放を要求して交渉は暗礁に乗り上げた。この機会を捉えて、タリバーンは12月17日、マレック將軍が逃亡して空白地帯となっていたアフガン西部のバラ・モルガーブ戦線を急襲し、再びアフガン北部への侵攻を開始した。しかし、タリバーンはファリヤブ県の一部を一時占拠したのみで12月30日、ドストム將軍に撃退された。

国連による和平調停

1996年末、国連のホル特使はタリバーンおよび反タリバーン勢力に対し、実務者レベルの会議開催を提案した。国連の和平調停を支持しながらも参加に前向きではなかったタリバーンも開催に同意し、実務者会議は1月13日から15日イスラマバードにおいて開催された。

タリバーンからはムラー・ウマル最高指導者の政治顧問ワキール・アフマッド師、モーセム・アフガニー在パキスタン・アフガニスタン大使および参事官、ラバニー派からは同派機関紙編集長でマスード司令官の腹心の一人イサック編集長、ドストム將軍派はポエンダー・在パキスタン代表およびシーア派イスラーム統一党からはターレブ・在パキスタン代表が参加した。会合は数日間に及び停戦達成に必要な条件等についてもかなり徹底的に議論が行われ、国連側が予想していた以上に実質的な協議となった。

実務者会議終了後、ホル特使は21日から22日までトルクメニスタンの首都アシハバードで開催された国連人道援助局主催によるアフガン援助国際会議に出席するとともに、トルクメニスタンのニヤゾフ大統領、ウズベキスタンのカリモフ大

統領および25日から26日に開催されたイラン政府主催のアフガン各派会合にも出席し、イラン政府首脳ともアフガン問題につき協議した。ホル特使は、各国首脳に対し国連の和平調停工作につき説明するとともに支援と理解を求めた。

第2回実務者会議は、2月24日から26日までイスラマバードで開催された。タリバーンは開催の直前まで参加の回答を延ばし、国連の和平調停にどの程度真剣なのか疑念を持たせることとなった。

数日間にわたる会議は前回とは異なり、反タリバーン勢力側は停戦を主張し、タリバーン側は捕虜釈放を停戦の条件として譲らず、すれ違いに終わった。ホル特使は信頼醸成のために数人の捕虜釈放を提案し、双方とも会議終了の数日後に国連を通じて捕虜釈放者のリストを提出することに合意した。しかし、捕虜釈放者のリストの交換は行われず、実務者会議における合意は無視され、紛争関係者を招聘して会合を行った以外に、実質的に何の成果も得ることができなかった。

そのためホル特使は、タリバーンと反タリバーン勢力指導者による実質的なトップ会談を提案した。ホル特使は、タリバーン指導者をはじめとするアフガン各派指導者と度重なる会議を通じて、特にガウス外相代行とドストム将軍による指導者レベル協議によって停戦を実現し、実質的な和平調停の進展を進めようと工作した。しかし、マレック将軍の反乱による急激な軍事情勢の流動化の波を受けて国連の和平調停は後退した。

アナン国連事務総長はアフガン紛争調停見直しのため、7月29日、ブラヒミ・アルジェリア元外相を新たにアフガン問題担当特使に任命し、ホル特使によって行われている国連の和平調停活動の調査を命じた。

ブラヒミ特使は8月中旬からおよそ1カ月をかけて、アフガン国内および近隣諸国をはじめとする日本を含む欧米諸国を歴訪し、関係者と意見交換を行った。その結果、アフガン紛争調停には近隣関係諸国の干渉の停止が重要な要素を占めるとした。

10月1日、アナン国連事務総長は、ニューヨークにおいてアフガン関係諸国会議(グループ21)を開催し、16日、ブラヒミ特使はアフガニスタン近隣諸国6カ国(パキスタン、イラン、ウズベキスタン、トルクメニスタン、タジキスタン、中国)およびアメリカ、ロシアを含む8カ国によるアフガン問題会議を開催した。23日、国連はホル特使が1997年末で辞任すると発表した。

ホル特使の辞任によって、国連はアフガン紛争解決に向けた新たなアプローチの模索に入った。特に、紛争の長期化の原因は、アフガン各派の権力闘争のみな

らず、アフガニスタンが近隣諸国の国家利害の衝突の場となっていることが、紛争解決を困難にしており、解決のためには、近隣諸国の利害の調整とアフガン各派に対する紛争調停を並行的に進める包括的な紛争解決の道を探るべきであったとした。

タリバーンと国際社会との軋轢

1996年、首都カーブルを陥落したタリバーンは、97年に至って二度にわたるアフガン北部制圧の機会を得たが、クンドゥーズ市を陥落させたのみで大きな軍事的勝利を得ることはできなかった。しかし、タリバーンはアフガニスタン全土の3分の2を制圧しているとして、国際社会に対し政府承認すべきであると主張した。さらに、国連代表権をラバニー政権が有しているのは国連の公正中立な立場を損ねるとして、タリバーンに国連代表権を賦与すべきであると主張した。他方、タリバーンの超保守的な政策が次第に明らかになるにつれ、西側諸国は大きな衝撃を受けた。特に女性に対する不平等な人権政策、教育の不均等等は、文化的・伝統的問題としてより、ジェンダー問題として西側で大きく取り上げられた。

9月29日、欧州連合のボニノ高等弁務官がカーブルを訪問中に、視察先の病院で逮捕されるという事件が発生し、当否を別にしてタリバーンの政策が厳しく非難された。さらに、カーブル北方、アフガン北部における戦闘およびカーブルにおいて、タリバーンはパシュトーン族以外のハザーラ族、タジク族、ウズベク族等の少数民族に対し、強制移住、強制逮捕を含む厳しい政策を施行したことから、タリバーンには人種偏見、女性蔑視、民族浄化の疑いがあるとして国際社会、特に西側から大きな疑惑の目で見られた。アナン国連事務総長は国連のキング女性問題特別顧問を団長とするジェンダー調査団をアフガニスタンに派遣した。11月18日、パキスタンを訪問したオルブライト米国务長官もタリバーンの人権政策を厳しく非難した。タリバーンは西側の非難に対し、戦時中であり西側の要求を受け入れることは困難であるとしてその保守的な政策を容易に変更しようとはしなかった。

こうした人権問題のみならず、麻薬およびヘロインのタリバーン支配地域における大量生産およびタリバーンと著名な国際的アラブ・テロリスト、オサーマ・ベン・ラーデンとの関係に疑惑が持たれ、特に西側諸国はタリバーンの行動に疑いを持った。タリバーンと西側諸国との軋轢は顕著となり、国連における代表権問題についても、国連のメンバー国によって構成される信任委員会は決定を延期

し、実質上棚上げにした。

経 済

1996年はタリバーンの勢力拡大で一時経済活動が活発化した。しかし、予想に反し、全国制圧が果たされなかったため期待したほどの経済活動は行われなかった。逆にイランとの関係悪化により国境が閉鎖された。アラブ首長国連邦のドバイからイランを経由してアフガニスタン南部に入る流通ルートは閉鎖されたため、ドバイからの輸入物資は、イランを経由してトルクメニスタンのアシハバードに入った後、アフガニスタン南部に入るという輸送ルートに変更された。そのため輸入量に比し輸送コストが高くなるという結果になった。さらに、紛争の長期化から戦費がかさみ、タリバーンは税収の増大をはかるため、輸入物資に対する増税を実施したことから、タリバーン支配地域に関する経済活動は96年に比較して伸び悩む結果となった。

反タリバーン支配地域においては、イスラーム国民運動のドストム將軍の根拠地であるアフガン北部のマザリシャリフが中央アジアと結ぶ商業の中心として経済活動の拠点となっていた。しかし、二度にわたるマザリシャリフにおける軍事衝突が治安を不安定にしたため資金の流出が引き起こされた。これまでマザリシャリフはアフガン内戦中においてさえ、一度も政治的・経済的に不安定な状況に陥ることはなく、アフガニスタンにおいて最も高い政治的安定度と治安の安全度を誇っていた。しかしマレック將軍の反乱事件を契機として、マザリシャリフにおける経済活動が極度に悪化したため、アフガニスタンにおける全般的な経済活動も停滞する結果となった。全般的な物資不足がほぼ恒常化するにつれ、各地で略奪・暴行事件が多発した。軍事的・政治的な流動化は経済状態の不安定を招き、米ドルと現地通貨アフガニーの換算レートも常に不安定な状況におかれることとなった。

他方、アフガン北部における天候が良好であったこともあり、農作物の収穫は良く、毎年問題となる食糧不足は見られなかった。しかし、タリバーンの支配地域であるアフガン南部においては気候不順が影響し、食糧不足に見舞われた。タリバーンは国連に対し食糧の支援を訴えた。パキスタンでも天候不順のため食糧危機に見舞われたが、パキスタン政府はタリバーンに食糧の援助を実施して危急を救った。

しかし、新たな軍事的流動化は、紛争の長期化を予測させることとなり逆に市場を不安定化させることとなった。

アフガニスタンを通過してインド洋へ延びる中央アジアのガス・パイプライン建設プロジェクトは、10月25日、コンソーシアムの設立がアメリカのユノカル、サウジアラビアのデルタ・オイル、日本の伊藤忠、ロシアのガスピロム、韓国等の参加によってアシハバードにおいて合意された。しかし、建設のためにはアフガン紛争が大きな障害となっている。

国連の人道援助

2月、トルクメニスタンのアシハバードにおいて国連人道局主催によって国連の人道援助計画に関する会議が開催され、タリバーンの人権政策に対し、北欧諸国は疑惑があるとして援助の停止を提案した。最終的にタリバーンの政策を見守ることで会議は終了したが、こうした会議の雰囲気を反映して、援助国からの目立った拠出もなく、1997年度対アフガニスタン国連統一アピールに基づく約1億3300万ドルの拠出要請に対し、拠出は約5000万ドルにすぎず、国連による人道援助活動も制限されたものとなった。

なお、国連は総額約1億5700万ドルにおよぶ1998年度対アフガニスタン国連統一アピールを発出した。

対 外 関 係

近隣諸国による紛争調停と外国干渉

アフガン紛争の解決に向けての努力は、国連のみならず近隣諸国においても積極的に行われた。イラン政府は、1997年の1月と12月、テヘランとイスファハーンにおいてアフガン各派の代表を招聘して紛争解決のための会合を開催した。タリバーンは、イランがアフガン紛争に軍事的干渉を行っており、中立的ではないとして代表の派遣を拒否した。そのため、実質的な紛争調停に至ることはなかった。

パキスタン政府もアフガン各派会合の開催を提案したが、開催に漕ぎつけるまでに至らずに終わった。12月、シャリフ首相は、対アフガン政策の実質的執行機関である軍情報機関の反対を押し切って、ラバニー大統領をパキスタンに招聘した。会合は、断食月が迫っていたこともあり1998年に持ち越された。

パキスタンおよびイランと同様に、中央アジア諸国のウズベキスタンおよびキルギスタンもアフガン各派の会合を開催する用意があると発表した。具体的な行動はとれずに終わった。

実際にはパキスタン、イランおよびウズベキスタンの三カ国の国家利害の対立が明白になる年となった。パキスタンは積極的にタリバーンに対する支援を実施し、イランは反タリバーン勢力への軍事的支援を増大して、タリバーンによる全国制覇を挫くため最大の努力を費やした。パキスタンとイランは互いの軍事干渉を認めながらも、規模において相手側が大幅に勝っているとして、相手側の干渉を非難した。マザリシャリフ攻防戦における両国の軍事干渉は明白で、特に、9月のマザリシャリフ攻防戦におけるドストム将軍の突然の復帰の後ろにウズベキスタンの支援があったことは確実であるとされた。事実、ドストム将軍は、タシケントからヘリコプターによってマザリシャリフ入りを果たした。

欧米および日本の対応

アフガン紛争に対する欧米および日本の関心は高く、人権問題に関しタリバーンと西側諸国との軋轢が起きたこともあり、比較的積極的な対応が見られた。日本は国連主催によるアフガン各派会合を開催する用意があるとして、国連の和平調停に積極的な役割を果たすことを表明した。3月、反タリバーン3派の代表を非公式に東京に招聘して話し合いを行い、さらに、7月にはタリバーン代表団を東京に招聘した。日本政府は、アフガン各派との会合のみならず、ブラヒミ特使を東京に招聘し、今後の国連との協力関係についても意見交換を行った。

欧米諸国においても、ノルウェー、ベルギー等が援助を通じた紛争解決の方法を積極的に模索しようとした。ベルギーのプロンク対外協力相は、アシハバードにおける国連の人道援助会議において議長を務め、ジュネーブにおける援助国、国連機関、NGOによる合同の人道援助会議も同相のイニシアチブによって開催された。ノルウェーも紛争解決の糸口を掴もうとして、ニューヨークにおけるグループ21の会議を主宰するなど積極的な動きを見せた。

1998年の課題

破竹の勢いで勢力を拡大したタリバーンは、その政策の未熟さおよび軍事作戦の失敗により全国制覇を果たすことができなかった。二度にわたるマザリシャリフ攻防戦の失敗は、タリバーン内に大きな傷痕を残した。イスラームの道徳的優

位の立場で聖戦を遂行してきたタリバーンは、同攻防戦において数千人が捕虜となったばかりでなく、約2000人が虐殺されるという結末に民衆の支持を失うこととなった。さらに、超保守的な政策の施行は多くの民衆に圧政と映り、女性に教育の機会を与えず、就業を許可しないタリバーンに徐々に不満が高まった。タリバーンはその支持基盤であるアフガン南部においても支持を喪失し、地元のカンダハールにおいて、強制兵役を拒否する住民の暴動を招いた。このような事態の変化にあっても、タリバーンは軍事的解決を求めて反タリバーン勢力と軍事対決を遂行していくものと思われる。しかし、タリバーンのこれまでの戦略上の失敗からみてタリバーンが自力で全国制覇を成し遂げる可能性はかなり低い。他方、反タリバーン勢力も内部の権力闘争によって自壊する可能性を有しており、タリバーンが相手の自壊に乗じて全国制覇をなしうる可能性も排除できない。

また、ウマル最高指導者に権力が集中しつつあるタリバーンの現状に不満を有する他の指導者達が内部改革を求めることも考えられ、1998年にはアフガン情勢が政治的に流動化する可能性が高い。ただし、パキスタン軍部が今後もタリバーン支援を継続していく場合は、タリバーンの現状に変化はなく、97年と同様、二極対立の政治状況が今後も続くと考えられる。

(国連アフガニスタン特別ミッション)

1月13日 ▶国連、アフガン各派実務者会合をパキスタンのイスラマバードで開催(～15日)。

16日 ▶タリバーン、カーブル北方のバグラム空軍基地およびチャリカル市を奪取。

21日 ▶国連、アフガン援助会議をトルクメニスタンのアシガバードにて開催(～22日)。

23日 ▶タリバーン、カーブル北方のジャバルサラージ、グルバハールおよびゴルバンドを制圧。

25日 ▶イラン政府、テヘランでアフガン各派会合、開催(～26日)。タリバーンは不参加。

2月21日 ▶パキスタン政府、アフガン国内の反タリバーン勢力を支援する反タリバーン分子に国外退去を命じると発表。

24日 ▶国連、第2回アフガン各派実務者会合をイスラマバードにて開催(～26日)。

25日 ▶タリバーンのムッタキー情文相、シーア派イスラーム統一党が支配するアフガン中央山岳地帯に攻め入りシェイフ・アリーを攻略したと発表。

3月2日 ▶タリバーン、報道関係者に対し、人物の撮影を禁ずる旨発表。タリバーンはすでに96年9月に禁止命令を発表。

5日 ▶タリバーンのムッタキー情文相、サウジアラビア反体制派の指導者オサーマ・ビン・ラーディンはゲストであり、アフガニスタンを離れるよう圧力を加える考えはない旨の声明を発表。

7日 ▶タリバーン、国連および米国に対し、今後とも国連の代表権の賦与等を求めるため、ニューヨークに事務所を開設すると発表。

20日 ▶タリバーンのシャリーア放送、アフガニスタンの新年の祭であるナウルズは非イスラーム的であるとして禁止する旨発表。

26日 ▶日本政府、アフガン紛争各派4派の

うちタリバーンを除く3派の代表を非公式に日本に招待。

4月9日 ▶ロイター、小麦粉の不足のためカーブルにおけるパンの値段が急騰と報道。

▶タリバーンのムッタキー情文相、サウジアラビアの反体制派指導者オサーマ・ビン・ラーディンがカンダハールにいと発言。

16日 ▶タリバーンの指揮官、バーミヤンの大仏遺跡を破壊すると発言。

5月19日 ▶マレック將軍、ドストム將軍に対し叛乱。

▶タリバーン、反タリバーンの重鎮イスマイル元ヘラート知事を逮捕。

24日 ▶マレック將軍、マザリシャリフを掌握。ドストム將軍、同市を脱出。

▶タリバーン、ラザック・ヘラート知事をアフガン北部司令官に、マレック將軍を外務次官に任命すると発表。

25日 ▶ドストム將軍、アフガニスタンを脱出、トルコに到着。

▶パキスタン、タリバーンを政府承認。

27日 ▶マザリシャリフにおいて、武装解除しようとしたタリバーンとシーア派イスラーム統一党との間で武力衝突。

28日 ▶タリバーンとマレック將軍派部隊の間で戦闘が発生。

31日 ▶ラバニー派のマスード指揮官、カーブル北方のジャバルサラージ市をタリバーンから奪還。

6月11日 ▶反タリバーン勢力、タリバーンが制圧していたアフガン北部の要衝ブリホムリを制圧。

17日 ▶タリバーン、アフガン北部のクンドゥーズ市を攻略。

30日 ▶シーア派イスラーム統一党、ハザラジャード地方のシバルトゥーにおいて空港を

開設。

7月17日 ▶日本政府、タリバーン代表団を日本に招待。

20日 ▶マスード指揮官、カーブル北方のチャリカール、バグラム空軍基地を攻略。

8月13日 ▶反タリバーン勢力、連合政府の内閣改造によりガフォルザイ外相が首相、マスード指揮官が国防相、マレック将軍が外相に就任と発表。

14日 ▶ブラヒミ国連アフガン問題特使、日本を含むアフガン関係諸国を訪問(～23日)。

21日 ▶ガフォルザイ首相およびシエラ派イスラーム統一党最高幹部等がバーミヤンにおける航空機事故にて死亡。

9月8日 ▶タリバーン、アフガン北部のホルム市を制圧。

9日 ▶タリバーン、アフガン北部のマザリシャリフに対して激しい軍事攻勢を実施。マレック将軍、同市を脱出。

12日 ▶ドストム将軍、マザリシャリフに帰還。

17日 ▶タリバーン、ウズベキスタンとの国境の町ハイラトン市を制圧したと発表。

23日 ▶ブラヒミ特使、ニューヨークにおいて、アフガン各派代表および関係諸国と協議。

29日 ▶ボニノEU弁務官一行、カーブルにおいて病院を視察中に逮捕。即時釈放。

10月1日 ▶アナン国連事務総長、アフガン関係諸国会合(グループ21)を開催。

3日 ▶反タリバーン勢力、マザリシャリフ郊外のカライジャンギーを奪還したと発表。

7日 ▶反タリバーン勢力、ハイラトン市を奪還したと発表。

13日 ▶タリバーン、シエラ派イスラーム統一党が支配するバーミヤンを爆撃。

▶反タリバーン勢力、アフガン北部のタシクルガン市を攻略。

16日 ▶ブラヒミ国連特使、アフガン近隣諸国・米・ロによるアフガン問題会合を主催。

23日 ▶国連本部、ホルム市をめぐってアフガン特別ミッション特使の辞任を発表。

25日 ▶アフガニスタンを経由する中央アジアの天然ガス・パイプラインプロジェクトに関し、コンソーシアムの設立が、米国のユノカル、サウジアラビアのデルタ・オイル、日本の伊藤忠、韓国およびロシアのガスプロム等によって合意。

26日 ▶タリバーン、アフガニスタンの国名をアフガニスタン・イスラーム国からアフガニスタン・イスラーム首長国に変更。

11月3日 ▶イスラーム国民運動内のドストム将軍派とマレック将軍派がアフガン西部で武力衝突。ドストム将軍派、アンホイを占領。

8日 ▶ロイター、アフガン中央山岳地帯ハザラジャードでは不作およびタリバーンによる経済封鎖のため食糧不足と報道。

17日 ▶マレック将軍派によって殺害された大量のタリバーン兵士の遺体を発見。

18日 ▶パキスタン訪問中のオルブライト米国防務長官、タリバーンの人権政策を批判。

23日 ▶ドストム将軍派、マレック将軍の拠点マイマナ市を制圧。同将軍はトルクメニスタンに逃亡。

26日 ▶ドストム将軍、捕虜交換のため代表をカンダハールに派遣。タリバーン、捕虜交換に同意。

12月1日 ▶イラン政府、アフガン各派会合をイスファハーンにて開催。

3日 ▶国連、アフガン支援国グループ会合をニューヨークにて開催。

8日 ▶シエラ派イスラーム統一党、タリバーンの捕虜11人を釈放。

22日 ▶ラバニエー“大統領”、パキスタン訪問。パキスタン政府首脳と会談(23日)。



① タリバーン新政権閣僚名簿

(1997年12月末現在)

カーブル暫定評議会

議長：ムラー・ムハンマッド・ラバニー

閣僚名簿

外相代行：ムラー・ムハンマッド・ハサン
 計画相代行：カリーディーン・ムハンマッド
 公衆衛生相代行：ムラー・アバース
 農相代行：ムラー・ムハンマッド・ナシーム・アフン
 辺境相代行：ジャラルディーン・ハカニー
 国防相代行：ムラー・オベイドラー・アフンド
 内相代行：マウラヴィー・ハイルラー・ハイ
 ルハー
 通信相代行：ムラー・アッラー・ドッド・ア
 フンド
 法務相代行：マウラウィ・ヌルディーン・タ
 ラビー
 文化・情報相代行：ムラー・アミール・ハー
 ン・ムタキ
 蔵相代行：ハジー・ムハンマッド・アフマ
 ディー
 商業相代理：ムラー・ハーフェズ・モヒブラ
 ー
 鉱山・工業相代行：ムラー・アフマッドジャン
 高等教育・職業訓練相代理：マウラヴィー・
 ハミドラー・ノーマニー
 水・電力資源相代理：ムラー・ムハンマ
 ッド・イサー
 公共事業相：ムラー・アッラー・ドッド・ア
 フンド
 教育相代理：サイード・ギヤスディーン・アガ
 ー
 検事総長代理：ムラー・ジャラルディーン・
 シンワリー
 中央銀行総裁代理：マウラヴィー・エサヌ

ラー・エーサン

カーブル県知事代理：アブドル・マナン・ニ
 ヤジー

② 主要政治勢力一覧

(かっこ内は指導者名、年齢)

イスラーム国民連合救国戦線

イスラーム協会(ラバニー、57歳)：タジク族
 が基盤。

アフガン解放イスラーム同盟(サヤーフ、51
 歳)：パシュトーン族が基盤。

イスラーム統一党アクバリ派(シア派)
 (アクバリ)：ハザーラ族が基盤。

イスラーム運動(シア派)(モーセニー、70
 歳前後)：ハザーラ族、パシュトーン族
 が基盤。

イスラーム国民運動(ドストム、40歳前後)：
 前共産主義政権のウズベク族民兵集団が
 基盤。

イスラーム党(ヘクマティヤール、48歳)：パ
 シュトーン族が基盤

イスラーム統一党ハリリー派(シア派)(ハ
 リリー40歳半ば)：ハザーラ族が基盤。

中道勢力

イスラーム党ハーレス派(ハーレス、70歳前
 後)：パシュトーン族が基盤。

イスラーム国民戦線(ギラニー、65歳)：パ
 シュトーン族が基盤

民族解放戦線(ムジャディディ、72歳)：パ
 シュトーン族が基盤。

タリバーン勢力

タリバーン(ウマル、30歳半ば)：アフガニス
 タンの南部、西部および東部を含む約3
 分の2の国土を支配。

③ 最近のアフガニスタン情勢

政治情勢

12. 戦闘の継続により、アフガニスタンにおける政治状況は拮抗状態となっている。対外的な軍事・政治支援によって、各派間の政治的対話は引続き妨げられ、民族間の溝が深まった。1997年全体を通じて、タリバーンも反対勢力も、軍事的なアフガン紛争の解決に反対し、真剣に政治的協議を行う態度は見られなかった。

13. 北部同盟内における指導者層の乱れも、政治的環境に影響を与えた。ウズベク人によって占められているジュンベシ運動(注：イスラーム国民運動)における内紛は顕著なものであった。指導者のドストム将軍は、5月、ライバルのマレック将軍が短期間タリバーンに寝返ったことによって、4カ月間トルコに追放された。同時に、マレック将軍はタリバーンに叛いてタリバーンの部隊をマザリシャリフから駆逐した。9月12日、ドストム将軍がアフガニスタンに帰還して再び北部の政治不安が生じた。指導者層における問題は、ガフォールザイ新首相が8月のパーミヤン空港における航空機事故で死亡したことによって追加された。

14. マザリシャリフ地域における国連の人道および政治活動は、再開された戦闘とその結果による混乱により深刻な影響を受け、さらに、国連職員に対する露骨な脅迫と国連事務所に対する略奪が連続してなされた。また、マザリシャリフのアフガン当局者は、国連職員がタリバーンのマザリシャリフに対する爆撃に協力していると誤って非難し、報復を行うと述べた。私はこうした出来事およびマレック将軍が国際赤十字委員会によるタリバーン兵捕虜への訪問を拒否したことに大き

な懸念を抱いている。

15. タリバーンが前提条件なしに北部同盟との交渉を開始することを拒否していること、および彼らの社会的・行政的慣習にも同様の懸念を有している。少女、女性への虐待、就業の権利、健康管理、教育に対して特に心配している。さらに、アフガニスタンは世界で最大のヘロイン生産を行っており、大多数の生産はタリバーン支配地域で行われている。国連国際薬物統制計画は、最近タリバーンがケシ栽培撲滅への協力に合意したと発表した。が、私は、心からタリバーンが誠実に、効果的に右合意の実施を遵守することを希望する。

16. 1997年、タリバーンは国際的承認と支援を得るため新たな努力を行った。タリバーンは、外国、特に東アジア、湾岸およびアメリカへ代表団を派遣した。パキスタン、サウジアラビアおよびアラブ首長国連邦は、5月、タリバーンをアフガニスタンの正統的な政府であると承認したが、他の諸国は承認を見合わせた。

17. 対外的に(国連の)メンバー諸国、特にアフガニスタンの周辺諸国は、内戦の継続に引続き失望と懸念を表明した。特に、長期的な戦闘行為がもたらす否定的な意味と、超イスラーム正統国家が国境に出現するという負担に懸念を抱いた。イラン・イスラーム共和国は1月初旬、イラン、パキスタンおよびトルコ各外相会合を開催し、その後、1月25日から26日にアフガン各派会合を開催した。タリバーンは、テヘランにおける会議に出席することを拒否した。カザフスタン、キルギスタン、タジキスタン、ロシア連邦およびウズベキスタン各国防相は、2月24日から25日のタシケントにおける会議において、共同で国境防衛にあたることを確認した。パキスタンおよびイランは、1年を通じてアフガン各派

の対話による交渉を通じた解決を推進した。しかし、いずれの努力も対話を開始することに成功しなかった。その理由は、両国ともアフガン各派から公正な調停者と見なされなかったことによる。

18. 1997年の双方に対する外国軍事支援に衰えはなかった。信頼できる目撃者によれば、北部同盟の軍事基地へマークのない航空機が軍事支援を実施し、同様に多数の輸送トラック隊が武器、弾薬、燃料をタリバーン支配地域に運搬したと報告した。さらに、国連職員は、数百名の外国軍事訓練部隊をカーブルの近郊で目撃した。外国軍事干渉の停止を呼びかける国連総会および安保理決議案に対するこうした露骨な違反は、国連の和平調停の努力を損ない、アフガン紛争を長期化させることとなる。また、地域の関係諸国間の関係は険悪となった。

所見および結論

36. アフガニスタンは、かつては超大国の対抗の場であったが、大国による戦略的動機が喪失し、その後、典型的なポスト冷戦における地域の民族紛争となった地域である。さらに、責任のある地域の政治的勢力、中央政府が実質上存在を停止した地域でもある。ここに、この国に和平をもたらそうとする継続的な国際的努力が実らない理由を説明することができる。

37. 1990年代初頭、アフガン各派および將軍たちは、狭量な各派間の利益を捨てて、国民和解のための共同行動をとることに失敗した。国連は、1980年代後半におけるアフガニスタンからの外国軍隊の撤退を首尾良く仲裁することができた。しかし、ナジブラ大統領が権力を幅広い支持を得た暫定的メカニズムに委譲できる準備をしていたにもかかわらず、

ムジャヒディーン各派はメカニズムの設立に合意しなかった。彼らの意見の相違は拡大し、1992年4月ナジブラ政権は崩壊して、カーブルは混乱と流血の中に投げ込まれた。それ以後、状況は悪化の一途にある。

38. 今日に至っても、アフガン各派は断固として戦闘の継続を主張し、外部勢力も物質的、財政的支援をアフガニスタンのそれぞれの顧客(注：アフガン各派)に継続して供給している。最近、これらアフガニスタンに潜在的影響力を有している主要勢力が、和平への関心を見せはじめたが、状況を前進させるための必要な行動を起こすには至っていない。

39. こうした環境にあっては、和平が達成できると考えることは、非現実的である。外部の支援者からの無限とも思える武器の供給を受け、戦うことによって問題の解決を図ろうとしている各派の指導者たちに、どのようにしたら和平を強制できるのか。こうした外部勢力による継続した支援(直接的関与がない無関心な国々も含む)が、アフガニスタンの將軍たちと各派に、彼らの政治的、宗教的および社会的目標を力によって達成することができると信じさせている。

外国干渉

42. 彼らは熱心に国連の和平努力を支援すると述べるが、同時に武器、資金およびその他の物資をアフガン各派に供出して紛争を煽っている。これら諸国は、満場一致で“外国干渉”を弾劾する。しかし、即座に、相手国が武器を供給していると非難する。

43. これらの対外的競争者たちには、それぞれのアフガン顧客を支援する彼ら自身の理由があると思われる。しかし、これら諸国はアフガニスタンの紛争を激化させた責任を担い、彼らは火をつけた責任を持つ。すでに、

この炎はアフガニスタンの国境を越えて拡大し、域内にテロ、山賊行為、麻薬密輸、難民流出および民族間と宗派間に緊張を増大させるという脅威を与えている。

44. アフガニスタンにおける戦闘を継続させる重要な手段としては、武器と物資が外部から供給されることにある。集めた証拠によって明白であるが、大量の軍事物資がアフガニスタンに搬入されている。アフガン各派が戦闘で使用している武器は“ソ連軍が残していった武器”であるという議論を容認することは困難である。アフガン各派の限定的な財政事情から見ても、彼らが大量の武器を武器市場から購入し、独自でアフガニスタンに搬入できるとは信じられない。

結 論

55. 域内および域外における各政府は、疑問の余地がないほど有利な立場にあり、これら各国が平和的解決の希求と、アフガン各派の不和を克服させることを促進すべきである。更に、明らかなことは、これら各国が肯定的、建設的な手段で影響力を行使しない限り、徹身的で、有能な私の代理人たちによるアフガニスタンにおける和平達成の努力は満足したものにならない。悲しいことながら、こうした環境は、国連の役割を不活発ではないというアリバイを残しているにすぎない。

56. 過去数年間を見ると、国連による和平努力を正当に継続することがますます困難になってきている。紛争の平和的解決に決定的な貢献をなすことが可能な、これら政府の根本的な政策の変更に関する、確信できる徴候はほとんど見ることができないことにある。最近、私はアフガニスタン情勢に関し関係諸国に、関心のレベルが増してきたと感じ、いくらか勇気づけられた。現在、いくつかの関

係諸国がアフガン各派を真剣に交渉につかせるための実際的な手段について協議を開始した。しかし、国連による和平努力が現実的な成功の機会を持つためには、各国政府が結束して行動を実施することが必要である。

(アナン国連事務総長第52回国連年)
(次総会報告書(要旨)1997年11月)